

明治の文体

——特に欧文体を中心として——

吉 村 明 子

I 目的と方法

明治の文学は、その成立の地盤となる文学観、思想、感情等の面において、これまでの文学を大きく変革したとみられているが、表現形式においても大きな転回を試みたといえる。その前半期は江戸時代と余り変らない文語体が主で、俗文体、和文体、和漢混淆体、講釈体等数種の文体が、文章の目的内容によつて、それぞれ適当に使い分けられていた。ところが明治20年前後から、新文化と共に欧文体の諸要素がとり入れられ、長く日本の文体を支配してきた漢文体、和文体と交錯しながら言文一致体をつくりあげてきたのである。欧文体は原文を読むことによつてとり入れ

られたり、明治初期盛んにおこなわれた翻訳文学から流れたりしたもの、その内容も作家により異なるが、欧文体の典型的な特徴として19項目を指摘することができるかと思う。これは、西洋式の文体を意識的に日本の文章にとり入れたといわれる山田美妙の作品を、私自身が分析した結果と、これまでの諸研究^{註1}をつきあわせて得た結論である。19種の欧文体が時期や作家によつて、どのような変遷をしていったか、小論は次の資料^{註2}を使用して、その変遷のあとを辿ろうとするものである。

○第一期（明治16年～同22年）

二葉亭四迷「浮雲」「めぐりあひ」「あひびき」

山田美妙「武蔵野」「蝴蝶」「花ぐるま」

坪内逍遙 「当世書生氣質」

○第二期（明治23年～同32年）

尾崎紅葉 「二人女房」 「多情多恨」

北村透谷 「我牢獄」 「星夜」

国木田独歩 「武蔵野」 「忘れ得ぬ人々」

○第三期（明治33年～同43年）

夏目漱石 「吾輩は猫である」

高浜虚子 「俳諧師」

長塚 節 「土」

島崎藤村 「破戒」

田山花袋 「蒲団」

○第四期（明治44年～大正10年）

有島武郎 「カインの末裔」 「或る女」 「小さき者へ」

芥川竜之介 「羅生門」 「鼻」 「奉教人の死」

志賀直哉 「城の崎にて」 「和解」 「ある男、その姉の死」

註1 江湖山恒明「日本文章史」 瀬古確「近代日本文章史」

徳田秋声「明治小説文章変遷史」

生田長江「明治文章史」 五十嵐力「新文章講話」

柳田泉「明治初期の翻訳文学」

杉本つとむ「近代日本語の成立」

土井忠生編「日本語の歴史」

吉沢義則「国語史概説」

註2 山本正秀氏「言文一致の変遷」(明治大正文学研究11号)

を参考にさせていただいた。

Ⅱ 19種の欧文体の変遷

A 語彙に関するもの

1 無人称主語

それは歌の文句です。(山田美妙「花ぐるま」)

無人称主語とは、英文の *this, that, these, those, it* などの無人称代名詞を主語として用いるもので、代表的な欧文体の一つとみなすことができると思われる。第一期では山田美妙が次のような三種類の無人称主語を使用しているが、後文を無人称代名詞でうける使い方は、第四期の有島武郎、芥川竜之介、志賀直哉に至るまで、全くみられない。

○前文の語をうけるもの

夜半、それが此時の「美」の原素で、 (「蝴蝶」)

○前文をうけるもの

「川風さむく千鳥啼く」……それは歌の文句です。

(「花ぐるま」)

○後文をうけるもの

蝴蝶も之をよく聞けば（乱れたながらも本性違はず）、これは主人の行宮のある辺の作男どもの話です。（中略）「おんいたはしさよ、若宮の。定業にてや在しけん、あへなく為らせたまひつゝ」

（「蝴蝶」）

同じく第一期の二葉亭四迷、坪内逍遙は、前文の句と節を無人称主語で言い換える用法のみを使用し、用例も少い。第二期では、尾崎紅葉がよくこれを用いているが、前文の語、句、節を換言する時に限られている。第三期に入ると、島崎藤村が、季節をあらわす主格の無人称代名詞を初めて使用し、長塚節の「土」では漠然としたものを指す方法がとられ、又田山花袋では後にくる単語を言い換えるという、新しい三つの用法があらわれている。

田山花袋の用例

これが——この孤独が芳子に由つて破られた。（「蒲団」）

長塚節の用例

お品の病体に手を掛けると医者是有繫に首を傾けた。それが破傷風の徴候であることを知つて恐怖心を懷いた。（「土」）

島崎藤村の用例

それは十一月の近いことを思はせるような蕭条とした日で、

（「破戒」）

前の二例は長塚節、田山花袋だけで第四期には見られない。第四期の有島武郎、芥川竜之介、志賀直哉の三作家は、無人称主語をよく活用し、特に志賀直哉の場合は、これを用いることにより、文章が簡潔になつていくように思われる。次に有島武郎と志賀直哉の用例を掲げておく。

有島武郎の用例

その幻像は他愛もなく消えて、記憶は又遠い過去に歸つて行つた。それが又段々現在の方に近づいて来たと思ふと、最後には岐度倉地の姿が現はれた。それが葉子をいら／＼させて、

（「或る女」）

志賀直哉の用例

その傍に一疋、朝も昼も夕も、見る度に一つ所に全く動かずに俯向きに転つてゐるのを見ると、それが又如何にも死んだものといふ感じを与へるのだ。それは三日程その儘になつてゐた。それは見てゐて、如何にも静かな感じを与へた。

（「城の崎にて」）

無人称主語は、時期が進むにつれて、種類も数も向上していく傾向をもち、日本文の中に自然に融けこみ、現在では、欧文体と感ぜさせなくなつてきているのではないだろうか。

2 無生物主語により人がその影響を受ける場合

雨が外出を妨げた。(土井忠生編「日本語の歴史」)

無生物の中でも有形と無形があるわけであるが、無形つまり抽象名詞が、人あるいはそれに関与するものに影響を与える場合は、特に次の抽象名詞主語の項に入れないで、この項に属するものと見なした。この第2項をよく用いているのは、第二期の国木田独歩、第三期の長塚節、島崎藤村、第四期の有島武郎で、これの時代的特徴は稀薄である。しかし、第三期、第四期では、無形無生物主語が、多く使われ、逆に有形無生物が少くなっているという傾向がみられる。志賀直哉は、無形無生物ばかり用いていることから、このことがわかう。次に有形無生物主語だけを使用した北村透谷の用例と、無形無生物主語だけを使用した志賀直哉の用例をあげておく。

北村透谷の用例

我が投ぜられたる獄室は世の常の獄室とは異なりて、全く我を孤寂に委せり、
(「我牢獄」)

志賀直哉の用例

その不愉快は残つて今度は自身を苦しめるのが例であつた。

(「和解」)

3 抽象名詞主語

全体の感じが悲壮である。

抽象名詞を主語に用いる方法は、第三期の夏目漱石により俄然用いられ初め、同期の島崎藤村、田山花袋、第四期の有島武郎、芥川竜之介、志賀直哉と、その勢いは続いているように思われる。又、使用法を調べてみると、擬人的取り扱いを受けている場合が最も多く、次に抽象名詞主語と述部がイコール関係の場合、最も少い用法は、抽象名詞主語が状態をあらわす語句で結ばれる場合となつている。次にこの三つの用法をただ一人使っている夏目漱石の「吾輩は猫である」の用例をあげておく。

吾輩はこの愉快の底に一大心配が横たわつてゐるのを発見した。休養は万物の晏天から要求してしかるべき権利である。

教育の効果はいよいよ顯著になつてくる。

4 外国語(含外来語)

外国語は、漢字、かたかな、ひらがな、原語を用い、これにルビを付けたリ、マークを添えたりして表記している。第一期第二期には、漢字にかなルビをふつたものと、かたかなが最も多く用いられ、第三期は、かたかなが最も多く、次に、原語、かたかな+マーク、かなルビ付漢字の順になる。第四期は、かたかなと原語が最も多く用いられている。つまり、外国語は主としてかたかな書きが用いられ、漢字は明治時代に、原語は大正時代以後に使われていることがわかる。調査した十四作家中、表記法が豊富な

は、第一期の二葉亭四迷と坪内逍遙で、従来の文章に新鮮味を与える一つの手段として、摂取しやすい外国語を使用したと思われる。

二葉亭四迷の用例

はッばアと、すぺんさあー

『ナシヨナル』

(「浮雲」)

坪内逍遙の用例

プロバブルな

ヒロイン

リレイト

ほんとうらしい

立おやま

物語した

グラウンド・ブレイン

ウイークネス

吉原

恥かしき事

(「当世書生気質」)

B 修辭に関するもの

5 受身形について(特に非情のものが他からの動作を被るもの

として表わされたもの)

牛乳は彼によりて飲まる。

(五十嵐力「新文章講話」)

非情のものが他からの動作を被るという新しい受身形は、第一期ではただ一人山田美妙が頻繁に使用し、彼の擬人法と共に当時の人々を驚かせたといわれている。二葉亭四迷、坪内逍遙にはこの受身形は全く使われていない。第二期は、尾崎紅葉、北村透谷、国木田独歩と三人が使用しているが、用例は少い。第三期では、高浜虚子、長塚節、島崎藤村、第四期では、有島武郎、志賀直哉と、この受身形も、明治後半以後大正期に愛用されているといえよう。そして、長塚節の場合は、この新しい受身形を用いること

により、文章が客観的になり、有島武郎の場合は、彼独自のスタイルが生まれ、志賀直哉の場合には、無人称主語と同様、文章を簡潔にしたように思われる。

山田美妙の用例

話の間だが一寸茲で忍藻の性質や身上が稍詳細に述べられなくてはならない。

(「武蔵野」)

長塚節の用例

墓の穴は焼けた様な赤土が四方へ堆く掻き上げられてあつた。

(「土」)

有島武郎の用例

発車を知らせる二番目の鈴が、霧とまではいへない九月の朝の煙立つた空気に包まれて聞こえて来た。

(「或る女」)

志賀直哉の用例

薬は静かにさされた。

(「和解」)

6 比較

比較も第三期、第四期において活用されており、特に島崎藤村、有島武郎、芥川竜之介、志賀直哉の四作家の用例にみられる比較の種類は豊富である。第一期では、「くよりも」という形と、「くだけ一層く」という二つの形があらわれているが、用例はきわめて少い。第二期では、「くよりも」の他に新しく、「くすればする

ほど」「の他に「ものはない」又、倍数を使った「より倍」が使われているが用例は第一期と同様少い。第三期になると、初めて最上級が藤村により使われているのが目立つ。第四期では、更に「の方がより」という用法が芥川竜之介と志賀直哉に用いられている。有島武郎の「或る女」にあらわれた比較の一部を次に掲げておく。

誰よりも先きに眼をつけたのはこの男であつたが、誰よりも先きに眼を外らしたのもこの男で、

最も深い隠れた弱点

声が急に一倍大きくなつて

葉子の心が傷めば傷むほど倉地の心は熱してみえた。

7 擬人法

変な雲が富士の裙へ腰を掛けて来た。(山田美妙「武蔵野」)

擬人法も従来から用いられている修辭であるが、山田美妙の用

例は、当時として大変奇抜であつたらしく、諸文献^{註3}に一樣に欧文

体の影響として述べられている。第一期では、この山田美妙、第

三期の長塚節、第四期の有島武郎の三作家が擬人法を駆使してい

るが、山田美妙と、有島武郎の発想法の間に差がないことから、

時期的変遷の特徴は今の段階ではつかめないように思う。つまり、

山田美妙の「武蔵野」と有島武郎の「或る女」の一篇文章を比較す

れば、時期的間隔がないように思われるのである。

山田美妙の用例

夕暮の淋しさは段々と脳を噛んで来る。

有島武郎の用例

残酷な譚計は、年若い二人の急所をそろ／＼と窺ひよつて、腸も通れと突き刺してくる。

この他長塚節が次のように、擬人法の殆んどを自然描写に使つて

いるのが目立つ。

稲の穂は北が吹けば南へ向いたり、南が吹けば北へ向いたりして其の重相な首を止まず動かしてはさらさらと寂しく笑ひはじめた。

(「土」)

註3 杉本つとむ「近代日本語の成立」

吉田澄夫「近世語と近世文学」

江湖山恒明「日本文学史」

8 譬喩

牛乳入見たやうな鉄葉製の手ランプに(山田美妙「花ぐるま」)

譬喩も従来からある修辭であり、欧文体の一要素と見なすこと

には疑問を抱いて調査したわけであるが、一つだけ欧文体の特徴

を見出したように思う。それは、間喩を用いない、ということでは

ないだろうか。第一期の三葉亭四迷、山田美妙、坪内逍遙の三

作家だけが間喩を用い、第二期以降には、全く間喩が用いられていないことが、それを証明しているように思う。そして時期が進むにつれて、直喩、それも節、句という複雑な構造をもった直喩が多く使われるようになっていく。しかし頻度の上では、擬人法同様、時期的推移はみられない。譬喩を好む作家は、第一期の二葉亭四迷、山田美妙、第二期の尾崎紅葉、第三期の夏目漱石、長塚節、島崎藤村、第四期の有島武郎、芥川竜之介という結果になった。

二葉亭四迷の直喩

フトまた起直ッて、蘇生ッたやうな顔色をして、（「浮雲」）

山田美妙の間喩

跡は降ッた、劍の雨が。草は貰ッた、赤絵具を。（「武蔵野」）

尾崎紅葉の直喩

葉山のお種様は蠟石細工のやうに、硬くて冷たい。（「多情多恨」）

夏目漱石の直喩

俗人に靈妙なる象徴詩がわからぬごとく、吾輩が彼らに向つて示す怒りの記号もなんらの反応を呈出しない。（吾輩は猫である）

長塚節の直喩

戸の隙間が臉を開いたやうに明るくなつた時鶏が復た甲走つて鳴いた。（「土」）

島崎藤村の直喩

古代を眼前に見るやうな小都会（「破戒」）

有島武郎の直喩

西洋人の白ペンキ塗りの別荘が、夕日を受けて緑色に染めたコケットの、髪の中のダイヤモンドのやうに輝いてゐた。（「或る女」）
芥川竜之介の直喩
毛をむしつた小鳥をそっくり丸焼きにしたやうな形である。

9 体言止め＋マーク

（「鼻」）

骨身をゑぐる寒さ！（山田美妙「花ぐるま」）

体言止めにマークを付けて使用した作家は、第一期の山田美妙、第二期の尾崎紅葉、北村透谷、第三期の高浜虚子、田山花袋、第四期の有島武郎の六人で、特に頻度数、ニュアンスの上で時期的特徴は見出せない。最も多く最も早く用いられている符号は感嘆符で、第三期から、田山花袋により疑問符が、第四期の有島武郎により、感嘆符を二つ、三つと重ねた符号が用いられているのが目立つ程度である。

田山花袋の用例

聖神なる恋とは何事？

（「蒲団」）

有島武郎の用例

命……命!! 命!!!

（「小さき者へ」）

10 詠嘆

あゝ何と言ッたら宜うまいませう。(山田美妙「花ぐるま」)

詠嘆は19項目のうちでも最も使用されていない修辭の一つで、第一期の山田美妙、第二期の尾崎紅葉、国木田独歩、第三期の島崎藤村、第四期の有島武郎、以上五作家が使用しているに過ぎない。感嘆符を用いているのは、この中、尾崎紅葉、国木田独歩、有島武郎の三作家である。有島武郎の使用法は、このような状態の中で、飛びぬけて巧みで、これを使うことによつて彼の文章にアクセントが付いているように思われる。

もう一度心置きなくこの世に生きる時が来たら、それはどの位いゝ事だろう。

おゝおゝ貞世!

あゝ痛い痛い痛い!

あゝ何がお前たちの頑是ない眼に涙を要求するのだ。

(以上「或る女」)

(「小さき者へ」)

この他、頻度においては、尾崎紅葉と、島崎藤村の使用度が高くなっている。

11 強勢(倒置法)

跡は降ツた、劍の雨が。(山田美妙「武蔵野」)

強勢も19項目中、最も使用されていない修辭で、第一期の山田

美妙、第三期の島崎藤村、第四期の有島武郎、芥川竜之介の四作家が用いているだけである。しかし、第一期と、第三期第四期の間に用法の上で少し差が見られる。つまり、山田美妙の作品には、主部と述部が何の繋ぎもなく置換される用い方がなされているが、第三期以降は、It……that……の構文を日本文に適用させた方法がとられ、文の一部を強めている。

山田美妙の用例

弱りました、これには蝴蝶も。

(「蝴蝶」)

芥川竜之介の用例

ことに内供をおこらせたのは例のいたずらな中童子である。

(「鼻」)

有島武郎の用例

その頃からだ、事務長が岡に近づくやうになつたのは。

(「或る女」)

行け。勇んで。小さき者よ。

(「小さき者へ」)

「小さき者へ」の例は、置換をした強勢であるが、又山田美妙のそれとは異っている。以上の例から、時期と共に、It……that……構文の応用の方が好まれてきたといえるのではないだろうか。

12 従属副詞句

吾を促し顔です、はや闇は次第に影を潜め始めて居て。

(山田美妙「蝴蝶」)

第一期から少しずつ使われているが、第四期の三作家は特によく使用しているようである。従属副詞句の末尾にくる語の中、「ながら」「のに」「から」「ので」「くて」「で」が多い。この傾向も第四期に顕著である。これを使用する度合の高い国木田独歩、島崎藤村、有島武郎、志賀直哉の用例をあげておく。

国木田独歩の用例

多分栗が落ちたのであろう、武蔵野には栗樹も随分多いから。

(「武蔵野」)

島崎藤村の用例

上田には弁護士の出張所も設けて有る。そこには蓮太郎の細君が根津から帰る夫を待受けて居たので。

(「破戒」)

有島武郎の用例

葉子は黙ったまま軽くなづいた、胸の下の所にある不思議な肉体的な衝動をかすかに感じながら。

(「或る女」)

志賀直哉の用例

ところが父はこういう事から取り締まっておかねば将来が心配だと思つたかもしれません。それは理屈で。

(「或る男、その姉の死」)

13 主語＋述語＋目的語

草は貰った、赤絵具を。

(山田美妙「武蔵野」)

第一期の二葉亭四迷、山田美妙、坪内逍遙、第二期の北村透谷、第三期の夏目漱石、島崎藤村、第四期の志賀直哉がこれを使用しているが、用例数も少く、第一期に多くみられるというのも、この修辭が日本文に合わないことを暗示していると思う。むしろこの修辭は、散文でなく韻文に多く使われているのではないだろうか。

14 関係代名詞

私が見タトコロノ記事

(吉田澄夫「近世語と近世文学」)

六の例のように関係代名詞を直訳するいい方は、二葉亭四迷と尾崎紅葉がそれぞれ一つずつ用いているだけでその他には全く見当らない。その代り関係代名詞を予想しただろうと思われる長い修飾節とか、非制限的用法からヒントを得て工夫されたと思われるものが、国木田独歩、芥川竜之介などの作品にみられる。

国木田独歩の用例

そこで此処に恩愛の契もなければ義理もない、ほんの赤の他人であつて、本来をいふと忘れて了つたところで人情をも義理をも欠かないで、而も終に忘れて了ふことの出来ない人がある。

(「忘れ得ぬ人々」)

芥川竜之介の用例

鼻は——あのあごの下まで下がっていた鼻は、ほとんどうそのように萎縮して

(「鼻」)

結局、関係代名詞を直訳する言い方は、明治初期の翻訳文学が動機で、珍らしがられ一時的に使用されたに過ぎないのであろう。

15 容貌描写

日本の文章で物足りない描写の一つに容貌描写があげられると思うが、殊に髪、眼、肌の色の表現は乏しいのではないだろうか。容貌描写を比較的詳しくおこなっているのは、第一期の二葉亭四迷、坪内逍遙、第四期の有島武郎で、この三作家は色にも触れている。つまりこの三作家は比較的欧文に接する機会に恵まれているので、欧文の容貌描写を摂取することができたのではないかと思われる。中でも有島武郎の場合は描写が卓越しているので抜き出しておく。

天才が持つと称せられるあの青色をさへ帯びた乳白色の皮膚、それがやゝ浅黒くなつて、眼の縁に憂ひの雲をかけたやうな薄紫の暈、霞んで見えるだけにそつと刷いた紅粉、際立つて赤く彩られた唇、黒い焰を上げて燃えるやうな眸、後ろにさばいて束ねられた黒漆の髪、

(「或る女」)

C 構文に関するもの

16 抽象名詞+動詞

愛情を見出す

(杉本つとむ「近代日本語の成立」)

これは漢文体にも多く見受けられるが、特に欧文体の影響と思われるものは、単に抽象名詞が訳語的だということばかりでなく、動詞との結びつき方が不調和であり、特異であるということではないだろうか。第一期では坪内逍遙、第二期では北村透谷、国木田独步、第三期では夏目漱石、長塚節、又第四期では有島武郎、志賀直哉、以上の作家が多く用いており、特に時期的特徴は見出せない。これはやはり漢文体が既に浸透しているので、組み合わせ方にも早く慣れたからであらう。抽象名詞と動詞の結びつき方は、様々でその数も多いが、比較的变化に富んでいるものをとり出しておく。

知恵を打込む

(四迷「浮雲」)

責任を着せ掛ける

(美妙「花ぐるま」)

腕力主義を拡張する

(逍遙「当世書生氣質」)

愛嬌を借用する

(逍遙「当世書生氣質」)

慾を乾かす

(紅葉「二人女房」)

情思を投げ入れる

(透谷「星夜」)

混乱と迷乱を形容する

(漱石「吾輩は猫である」)

思索を交換する

(節「土」)

意気を愛する

(藤村「破戒」)

味を味はふ

思想を提げて

愛を味つた

同情を動かす

不快を押し包んで

(花袋「蒲団」)

(武郎「或る女」)

(「〃」)

(竜之介「鼻」)

(直哉「和解」)

17 会話体

会話体は、作品の内容、作家の好みにより全体を占める割合も、記述方法も様々であるがその形態は第一期から第四期まで殆んど変りない。つまり逆に考えてみれば、二葉亭四迷が、「浮雲」で思い切り新しい方法を試みた功績が非常に大きいということである。江湖山恒明氏はこの「浮雲」の会話体について「和文に見られる、『いはく……と言ふ』のような形式では勿論なく又、江戸時代の戯作文芸作品以来の、きまつた書きあらわし方ともことなる」と述べておられる。したがつて欧文体から影響を受けたこの新しい会話体は、二葉亭四迷以降の作家にうけつがれて今日の文章をつくりあげるのに大きな役割を果したといえよう。最後に第一期の二葉亭四迷の「浮雲」に用いられた会話体と、第四期の志賀直哉の「和解」の会話体の一節を並記しておく。

二葉亭四迷の用例

文三は座舗を立出で梯子段の下まで来ると、後より

「文さん、貴君の所に今日の新聞が有りますか。」

「ハイ有ります。」

「最うお読みなすツたの。」

「読みました。」

「それぢャア拝借。」

トお勢は文三の跡に従いて二階へ上る。

志賀直哉の用例

すぐ隆子という三番目の妹と昌子という小さい四番目の妹とが来た。二人は、

「ただ今」と言つてお辞儀した。隆子は自分を見てちよつと驚いたような顔をした。そして少し当惑したような顔をして、
「おとう様もいつしよにお歸りになつたのよ」と自分を見て言つた。

「よろしい、よろしい」と自分は答へた。

「淑子は禄子はどうした？」と祖母がきいた。

「禄オちやんもいつしよよ」

「禄オちやん！」と昌子が大きな声を出して呼んだ。

禄子の「なあに？」と言う声がむこうでした。(「和解」)

註4 江湖山恒明「日本文学史」

18 句読点とマーク

? ! …… —、。 ゴマ白点 ()

句点、読点の他に第一期の山田美妙、二葉亭四迷がゴマ白点を使用している。又尾崎紅葉は読点は全く使わず、句点だけを利
用している。鍵括弧は全期を通して、会話に使用されるのが最も
多く、第二期以後、強調とか作品名にも使われるようになってい
る。二重括弧は作品名、会話の中の引用によく使われている。丸
い括弧は説明にのみ用いられており、比較的第一期、第二期に多い。

疑問符、感嘆符は全期を通じてよく使われているが、坪内逍遙
と芥川竜之介の作品には全く用いられていないのが興味深い。そ
の他ダツシュ、傍点、点線も時期的特徴をもたない。これに比べ
て傍丸点(。。。)とか傍黒点(……)二重傍線(=)は、第
一期第二期だけで、以後全く姿を消している。全般的にみて、句
読点とマークは撰取しやすいのか、どの作家もよく用いている。

19 その他

この項は、今迄にあげた種の中には入らないが、欧文的ニユア
ンスを持つている部分を印象により書き出したものをまとめたも
のである。その中、—— and ——とか、進行形、Nothing
……but 等が多く集まったが以下はその用例である。

a —, —, and —

第一期の山田美妙、第二期の尾崎紅葉、長塚節、島崎藤村、有

島武郎、志賀直哉が用いている。

志賀直哉の用例

父がひどくおこつてゐる事、そしてしかられた事、そしてあし
たの朝京都是引き上げて大阪へ行くという事を書いた手紙だつ
た。
(「和解」)

b 進行形

第三期の夏目漱石、長塚節の二作家がこれを使用している。

夏目漱石の用例

彼らはこの運動術を利用して砲火の功を収めんと企てつつある
としか思われない。
(「吾輩は猫である」)

c nothing > but

長塚節の用例

彼等は苦しい時に苦しむことより外に何にも知ることがないの
である。
(「土」)

d 仮定法

夏目漱石の用例

もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍に餓
死したかもしれないのである。
(「吾輩は猫である」)

e ……enough to……

志賀直哉の用例

順三が約束の時間に来ず、すでにできた料理を出させずにみんなで待つてゐる事は、その場合多少主人役の位置にいる父の氣をいらださせ、かんしやくを起こすには充分な事であつた。

(「和解」)

f too-to

長塚節の用例

お品は此れまでは明るい外を見ようと思ふには余りに心が鬱して居た。

(「土」)

この他、第四期の有島武郎、芥川竜之介、志賀直哉の文章には、何処か欧文的味わいを含んだ箇所があるが、次第に日本文も様々な要素を巧みに包含して、欧文体として区別しがたい形態をとつてきているように思われる。

以上簡単に19項目の欧文体の変遷を述べたが、最もよく攝取されているものは、抽象名詞+動詞、無人称主語、外国語、句読点とマークであろう。つまり、語彙とかそれに類する句読点やマーク等、てつとり早い道具は、誰にでも上手に使えらるゝということになる。

Ⅲ 時期、作家別欧文体の変遷

A 時期について

明治16年から大正10年までを四期に分けて調査したが、時期的特徴をまとめてみると次のようになるだろう。

第1期は欧文体というよりも欧文の語彙、句読点、マーク等の部分的攝取が盛んであつた。又この時期で欧文体のニュアンスをつかんだのは二葉亭四迷で、特に会話体の新しい試みは後期に大きな影響を与えたと思われる。坪内逍遙は、外国語を豊富に盛り込んだが、地の文が文語調であるのがわざわざいしてかテンポ、リズムとも二葉亭四迷のそれに追いつかなかつたようである。山田美妙は各修辭に新しさを盛り込んで当時の文壇を賑わしたが、余りにも小手先の技巧が目立ち本質を歪めてしまつた感がある。彼の好んで使つた倒置法はその後殆んど使用されなくなつたし、擬人法、譬喩、体言止めも徐々に形を変えていつたことから、如何に特殊なものであつたかわかる。しかし山田美妙の特異な試みは当時の人に欧文体の新鮮さを感じさせるに充分であつたことから、山田美妙の功績は大きいといえよう。結局、第一期は試みの時期だつたのではないだろうか。

第2期は、一時波に乗つた言文一致文が次第に力を失い、文章史でいわゆる「停滞期」と呼ばれる頃から、徐々に力を盛りがえす息吹きの時期までを意味している。このことは、やはり欧文体の攝取にも反映しており、尾崎紅葉は、かなりの欧文体を攝取し

ながら、発想が伴わない為ニユアンスを出していない結果になつている。しかし北村透谷、国木田独歩はそれぞれ自分のスタイルに欧文体をはめこみ表面的に成功している。いわばこの時期は、欧文体をとり入れて新しい境地を開きたいと腕回している継承反復期ともいえよう。

第3期は一応言文一致体が確立し、いよいよこの上に作家独自のスタイルを造成していく時期で、欧文体も思う存分駆使されている。つまり今迄試験的に使われていた欧文体を自分の作品にあらう手法として体得し、それに振りまわされることなく有利に転回させ効果をあげていると思われる。体得駆使の時期である。

第4期は口語体が完成した時期といわれているが、欧文体に關しても有島武郎を頂点に種類、頻度共最高となり、欧文体がすっかり体得されていることがうかがえる。第一期と比較してみると、無人称主語、抽象名詞主語、比較、受身形、抽象名詞＋動詞の使用度が高くなつており、逆に擬人法の使用度のみが低くなつているのである。このように大正時代に入つて欧文体は花を咲かせ、有島武郎の作品は花びら健在のうちに実をつけた状態、芥川竜之介の作品は花びらが少し欠けた状態、志賀直哉のそれは、実が余すところなくあらわれた状態といえるかもしれない。この実は又土に落ち様々な枝振りをもつた木に成長し今日に至っているのだ。

はないだろうか。

B 作家について

欧文体の摂取方法により作家を系統づけてみたが、まず第一期の二葉亭四迷は「形」と「質」、坪内逍遙は素直な「形」、山田美妙は「形」と「技巧」の摂取と仮定すると、第二期の尾崎紅葉は、山田美妙の系列、国木田独歩は二葉亭四迷のもう一つの摂取法——自然描写を受けついでいる。北村透谷はここで初めてニユアンスをとり入れたと思われる。第三期の夏目漱石は、坪内逍遙と北村透谷の両方を受け継ぎ、藤村は、二葉亭四迷と北村透谷の混合、又長塚節は、国木田独歩の跡を引き継いでいる。第四期の有島武郎は、夏目漱石と島崎藤村の両系列を統合した摂取法ということになる。この他第三期の田山花袋、高浜虚子、第四期の志賀直哉、芥川竜之介は、間接的に影響を受けた作家と考え、系列に入れることは避けた。以上のような分類を試みたが、まだまだ考慮しなければいけないと思つてゐる。

以上欧文体の変遷を時代、作家、項目別に述べてきたが、欧文体という言葉は明治時代の、まだ目新しい時に使われていたもので、今日では、この言葉がいらない位、現代文の要素としてすっかり消化されてしまつていのではないだろうか。